

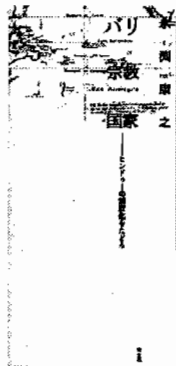
読書

バリ・宗教・国家

永淵 康之著

インドネシアのバリ島観光は日本人の間でも人気が高い。バリ島観光の最も重要な資源は文化であり、日々の儀礼にも現れている堅固な信仰心に支えられた「伝統的」な生活が観光の特色となってきた。イスラム教徒の多いインドネシアでもバリ島だけは八七・四%がヒンドゥーである。しかし著者は、バリとヒンドゥーとの関係を当たり前に受けとめず、人びとによる物の見方に「驚き」を取り戻せないかと考える。

このために注目したのは、バリ社会の宗教制度の基本構造である。それは、オランダによる植民地支配の下で宗教的な権威が新たに承認され、儀礼を教義上の真理と結びつけながら、政治の中心が物事を取り決め執行する体制にほかならない。この確立過程は、旧王国の秩序をヒンドゥー的官僚制度とも呼びうる祭政一致の体制とすることで、バリとヒンドゥーとの関係は不動のものになったというのだ。



(青土社・三、二〇〇円)

▼ながぶち・やすゆき 59年生まれ。名古屋工業大学教授。専門は文化人類学。著書に『バリ島』(サントリー学芸賞)など。

ここでは宗教世界だけが孤立して領域化されることはなかった。すなわち植民地統治にはじまる近代は世俗化をすくなく意味せず、近代ではむしろ宗教制度が再生産されたという

近代の祭政一致の成立に注目

のだ。これは、「王と最高位の司祭が並び立つ権威の構造が、統治体制の変遷と平行して実体化された」ためでもあった。この視点は、中東や南アジアの歴史構造と比較する上でも重要といつてよい。

それにしても、二〇〇二年十月にバリ島で起きた陰惨なテロは日本人にも大きな衝撃を与えた。島の社会分裂は、情報とヒトの移動によって、世界のヒンドゥーの動向がすぐにバリ島に伝播してくる点と無関係ではない。バリ島の儀礼世界とは別に、ヒンドゥーの価値観を純化しがちな流れが近年強くなっている。ヒンドゥー教徒でもあるバリ人がたやすくヒンドゥーの流れから離脱できるものでもない。

バリ島の「神の領分」にバリ人の歴史になじみのない外来のヒンドゥーが影響力を深めていると著者は論を結ぶかのようだ。バリ人の苦悩と未来への不安を静かに浮かび上げさせる好著でもある。

東京大学教授 山内 昌之